

[026] 語文研究表紙奥付等

<http://hdl.handle.net/2324/10243>

出版情報：語文研究. 26, 1968-10-31. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



編集後記

六月二日、米軍機墜落以後百四十日経ったが、ファントムの残骸は依然として、電算機センターにひっ掛ったまま、颱風にも安泰なのは皮肉である。その間、学園には、再三に亘って、悲しむべき風景が展開した事は、会員諸氏もつとに御承知の通りであろう。この中で、ともかく本号も無事に出せた。我々の研究室では、この非常事態下にも、研究体制が何とか維持されている証拠と、御安心願いたい。

本号は御覧の通り、若い方を主として、近世文学小特輯の形となつた。未熟な点もないが問題意識の新しさをお汲み取り頂きたい。また、女性が論文六篇、半数を占めたのは、創刊以来はじめてである。女子学生が過半に達する当今の実情から、当然の事にすぎないといふものの、これが将来への良き刺激となる事を期待している。

なお書評には、鶴・原口・海老井の三氏を煩わした。御多忙の中をにわかに御無理をお願いした向きもあり、御礼申上げたい。

去る三月福田教授停年御退官で、今さらのように、ポッカリと大きな穴があいた感が一入である。また中村教授は七月以来文学部長の重責を荷って、連日連夜、文字通りの劇務に奮斗されている。おからだの事をお案じ申し上げている、と言ったら、教授からは一喝されそうだが、研究室員一同の偽らぬ本音である。

心落着かぬ季節がなお当分は続くであろう。われわれの研究室もそれなりに色々の問題を問われているに違いない。学問や教育の場に自明の前提であつた相互の人間の信頼が、実は自明ではなかつたという事が万一にもあるなら、それを取り戻す為の努力が何を措いても必要だろう。新しい時代の学問とは何か、真剣に考え込まざれし御助言頂きたい。 (今井 記)